

## あたりまえにありがとう

吉永 崇大  
よしなが しょうた

夏休み十日目。今日もいつもと同じ朝がやってきた。目がさめて顔をあらう。いつもより少しおそい朝ごはんを食べると、大会が間近となった水泳部の練習にそなえて、道ぐのじゅんびをする。夏の暑さには、キンキンにひえたお茶がぜつ対にひつよう。水を入れると、お茶を水とうにながしこむ。じゅんびはととのった。いやその前に弟と妹の世話もわすれずに……。そう。今日はいつもとはちがう。ふだんのほくはこんなことはしない。と言うのも、今朝は、お父さんもお母さんもない。きのうの夜、お母さんのぐ合がわるくなって、きゆうきゅうのびょういんに行っているからだ。

「だいじょうぶ。すぐに帰ってくるから。ばあちゃんが来てくれるからね。」  
そう言っ、お父さんとお母さんはびょういんに向かった。お母さんのことが心ばいな気持ちも、自分たちだけでだいじょうぶなのかというふあんもあつたけど、ぼくは「自分がなんとかしなきゃ。」という気持ちにすっかり切りかえていた。

そして、じゅんびをしながら、いろんなことを思い出そうとしていた。部活が終わって帰ったら、いつもお母さんはせんとくを終わらせていたな。そうじをして、昼ごはんのじゅ

んびをして、ぼくたちが食べ終わると、弟や妹をお出かけにつれて行つてた。まずは、そこま  
でだ。さあ、何からしよう。ぼくに何ができるんだらう。あれこれ思い出しながらお母さん  
のことをいろいろ考えた。「夏休みに入つて、大へんだつたんだな。」「ぼくたちのためにむ  
理してたのかな。」「ぼくの中を、いろんな思いがかけめぐる。いつもぼくたちのためにはた  
らしてくれているお母さん。毎日ぼくたちのリクエストを聞いて、食事のメニューを考えてく  
れる。帰るとげんかんで出むかえてくれて、学校に行く時は、ぼくを元気づけようと声をか  
け、見えなくなるまで手をふつてくれる。毎日くり返される同じこと。あたりまえにやつて  
くる毎日、ぼくの周りにはあたりまえのようにみんながいる。でも、それは、本当はあたりま  
えじゃない。ぼくはお母さんやお父さん、そして弟と妹の家ぞくみんなに支えられている。  
そのあたりまえがどれほどすばらしいことなのか、この夏、ぼくは気づいた。そして、そんな  
みんなの思いを大切にしなきゃいけないということも。

部活に出かけようとした、ちょうどその時お父さんの車が帰つてきた。お母さんは、やつ  
ぱりしんどそうだったけど、点をきをして少し顔色もよくなり、

「だいじょうぶよ。心ばいさせたね。」  
とわらつて言った。

「行つてきます。」

いつもと同じ朝。ぼくは、いつもより大きな声で部活に出かけた。